派遣隊員レポート
協力の中の青春　Vol.22

奥島誠（オクシマ　マコト）
平成１９年度４次隊　自動車整備　マラウィ共和国

プロフィール

滋賀県甲賀市生まれ。県内の県立高校普通科を卒業後、千葉県内の自動車整備士の専門学校に入学。専門学校卒業後すぐに青年海外協力隊１９年度春募集に応募。
１９年度４次隊で自動車整備士として２００８年３月にマラウィ共和国へ派遣。

活動している国について

アフリカ大陸南部に位置し、国の東部に世界遺産の指定を受けるマラウィ湖を有する。乾季、雨季を通して比較的緑が豊富な農業立国。九州と四国を合わせたほどの面積に約１３００万の人々が暮らす。国民性が温厚で社交的なため「Warm heart of Africa」としても知られる。首都はリロングウェ。

活動や生活について

活動内容は、首都リロングウェにある政府の職業訓練校で自動車の構造、保守管理等の指導。学生の年齢層は１９～２５歳の自分と近い年齢の学生が多く、授業以外では学生と友人のように接する機会も多い。日本は豊かな国、自動車の国、そして「カラテ」の国として学生の間でもよく知られており、また、同じような理由から同僚の教師をはじめ、近所のマラウィ人からも好意的に自分は受け止められている。

アフリカといえば物資が不足しているイメージがあったが、赴任してみると意外とそうでもなく、首都で生活しているせいもあると思うが、先進国の人間でも生きてゆくには特に不自由の無い生活を送っている。活動に関しても、配属先の学校には台湾をはじめ各国からの支援によってある程度の職業訓練が可能な設備が整っている。

教員として活動する自分にとって最大の喜びは、やはり自分のつたない英語でも、学生が授業の内容を理解し、何か質問をしても自分の求めていたコトを答えてくれたときだと思う。これは本当にうれしい。だいたい、前日の夜には頭を抱えながら授業の準備をするが、その苦労もこの喜びのためなら大したコトはない。

その反対に、悲しいコトは、自分の伝えたいことが伝わらず、学生も自分も満足のいかない授業をしてしまった時。自分の未熟さを痛感し悲しくなってしまう。ただ、それをバネにし「基本に忠実で、分かりやすく、学生の今後の人生のためになる授業」を心がけてがんばっている。

マラウィの人々は穏やかで、争いごとを好まず、素朴だけれども暖かい人間が多い。先に紹介した「Warm heart of Africa」と表現されるのも納得がいく。

しかし、マラウィでの生活は、忍耐力の修行だとも思う。特に「時間」に関しては赴任して１年が経とうという今も困っている。ここでは８時に始めると言えば９時に来る。授業を１時に始めると言っても、２時からしか始められない。人々は基本的に時間に関して「目安」程度にしか思っていないようである。これには今もまだ振り回されている。

ただ、このゆったりした生活は「キチキチ」した日本での生活に慣れた自分を開放してくれる。そういう意味では、ここでの生活は、日本よりもリラックスして送っていると思う。

以前、協力隊隊員としてマラウィに派遣されていたＯＶの方とマラウィでお会いした時のこと「当時からどのようにこの国は変わりましたか？」との問いに、そのＯＶの方は「ほとんど変わらないね。少し車が増えたくら

いかな？」とのこと。

　何か大きな問題がこの国の発展を妨げているのかもしれない。しかし、人々の生活がのんびりしているから、国の発展ものんびりなのかもしれない。

　理由は何であれ、残りの任期も自分はこの国の人々のためになる活動を、この国の人々と一緒にしていきたいと思う。

マラウィ北部のとある村へ他の隊員について訪れた村での1コマ。
普段は首都にいるため、いくらマラウィでも人と人の繋がりが希薄になりがち。
しかし、村では、本当にこの国の人々の心の豊かさに触れた気がします。

自分の配属先の学校での授業風景。
経済的な理由から、作業服を買えない生徒も多く、実習授業も私服で行っています。また、エンジンやトランスミッション等の教材の数が足りないため、1つのエンジンを20人が囲むということもしばしば･･･。それでも、みんな仲良く勉強しています。